

## 弁護できないヒロシマ修正主義が、今日までアメリカを支配している（前半）

【訳者注】論者は、マサチューセッツ大学歴史学教授。ヒロシマの原爆投下を、70年以上たった今でも正当化するアメリカ人一般を、冷静に、しかし厳しく、アメリカ人として批判している。これを選んで翻訳する私のことを、「72年も前のことを根に持って…」などと批判する“平和主義者”がもしあれば、それは間違っている。まず、真珠湾攻撃に始まって、原爆投下で終わったあの戦争は、今も終わっていない。それどころか、今ようやくその意味が見えてきた。それを知ることは、日本人に対してだけでなく、人類に対する義務である。次に、論者も翻訳者も、恨みを動機にして書いているのではない。過去を、（その過去と同じことが起こりつつある）現在との関連において、知るために書いている。端的に言えば、関心は、どうすれば人類が生き延びられるだろうか、ということであって、どうすれば昔の恨みが晴らせるか、ということではない。アメリカというもの、正確に言えば、アメリカを動かしている「深層国家」というものが、どういうもので昔からあったのかを究明することは、我々の義務でなければならない。参考文献：「オバマの広島スピーチはこうあるべきだった」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160602.pdf>

Christian Appy

August 8, 2017



**72年前のこの週、我々は25万人の市民を焼き殺した。にもかかわらず、我々はいまだにこの空爆を、慈悲の行為であったと考えている。**

「絶対に一瞬たりとも後悔してはならない。それは時間の浪費である。」

——ハリー・トルーマン大統領

いま我々は、広島と長崎の原爆による壊滅後、72年経ってここにいる。そして私は、人間虐殺に原爆を用いた世界で最初の国家として、我々が、道徳的な考慮に一步でも歩み寄ったかどうか、疑わしく思っている。アメリカ大統領がたった一人でも、公式の謝罪をすること

が今後あるだろうか？ わが国が Little Boy や Fat Man——あの太陽よりも強烈な 2 発の爆弾——を落としたことを悔いることがあるだろうか？ 我々の国は、瞬時に何千もの人間を蒸発させ、更に何万人を焼き殺し、信じられない強力な衝撃波と火の嵐によって、爆心地から何マイルも先まですべてを破壊したそのやり方を、理解することがあるだろうか？ わが国はいつか把握する時があるだろうか——あの“黒い雨”が放射能を拡散させ、さらに多くの人々を、ゆっくり、苦痛を与えながら殺し、最後には 2 つの市を合わせて、控えめに見積もっても 25 万以上の人々を死なせたことを。

<http://www.amazon.com/dp/0060742852/ref=nosim/?tag=tomdispatch-20>

この国の過去 72 年の、永続的な軍国主義化と核の“現代化”を考えるならば、その答えは明らかに「ノー」だと思われる。それでも私は歴史家として、我々に国家的な悔悟がないことを、より深く探ろうとしてきた。アメリカ的なものとして、いつも私の頭に浮かぶ言葉がある。それは 1970 年のお涙頂戴映画 Love Story の一行である——女主人公が、そのボーイフレンドが彼女に謝罪し始めるとこう言う、「愛とは、済まなかったと言わねばならないことが、絶対にないことを意味するのよ。」これは、アメリカ人の記憶に残る、最も馬鹿げた定義の一つでなければならない。なぜなら、本当の愛はしばしば、謝罪し償いをする精神力を意味するからである。

<http://thebulletin.org/modernizing-nuclear-arsenals-whether-and-how7881>

<http://www.imdb.com/title/tt0066011/>

ところがこれは、多くのアメリカ人が、我々が愛国主義と呼ぶ、より幅広い愛について考えるときには、きわめてよく当てまる考え方である。ごくまれに例外はあるが（第二次大戦中に抑留された日系米人犠牲者に対する、謝罪と賠償を決めた 1988 年の議会法案 など）、残忍な権力の行使ということになると、真の愛国主義とは、何よりもまず、済みませんと言う必要が全くないことを意味する。他国が自分の悪を認めないといって非難する政治家自身が、我々はどんなことでも謝罪すべきではないと、決まって主張している。例えば 1988 年、米海軍がペルシャ湾で、イランの民間航空機を撃ち落とし、66 人の子供を含む 290 人の乗客すべてが死んだとき、ジョージ・H・W・ブッシュ副大統領は、大統領の代役として、「私は合衆国に代わって謝罪は決してしない。決して。事実がどうであるかは、私にはどうでもよい」と宣言した。

<http://www.npr.org/sections/codeswitch/2013/08/09/210138278/japanese-internment-redress>

[http://www.slate.com/articles/news\\_and\\_politics/war\\_stories/2014/07/the\\_vincennes\\_downing\\_of\\_iran\\_air\\_flight\\_655\\_the\\_united\\_states\\_tried\\_to.1.html](http://www.slate.com/articles/news_and_politics/war_stories/2014/07/the_vincennes_downing_of_iran_air_flight_655_the_united_states_tried_to.1.html)

<https://www.youtube.com/watch?v=10qatUWwIeg>

しかし事実を言うなら、ブッシュの言っている、アメリカは悔悟しないという態度は、全然十分なものではない。結局、アメリカ人は、1941年から絶え間なく戦争をしているにもかかわらず、自国を、平和愛好国だと見ようとしている。これは彼らが、否定し謝罪しないことだけに留まるのではない。彼らは、納得させるための物語と説明を（どんなに歪曲され省略されていても）与えようとする。人間の絶滅が日常の現実になっているほどの、脅威を与えている爆撃を、正当化するために作り出される物語は、我々の歴史上、最も成功した合法化物語だと言ってよい。72年経った現在も、たえず増え続ける、説明と矛盾する事実の証拠の山にもかかわらず、原爆投下の彼らの解釈は、民衆の記憶に深く根を張り、教科書に書き込まれている。何十年も過ぎて、終末的な危機の迫った今、済まなかったという必要がないことを確かなものとした、原爆に対する自己弁護の、アメリカ流アポロギア（弁明）を、我々は考え直す時がきている。

## ヒロシマ・アポロギア

1945年8月9日、大統領ハリー・トルーマンは、ホワイトハウスからラジオ演説を行った。「世界は、最初の原子爆弾が、軍事基地ヒロシマに落とされたことを知るでしょう。これは、我々がこの最初の攻撃で、可能なかぎり、市民を殺すことを避けるためでした」と彼は言った。彼は、2つ目の原爆がすでに長崎に落とされていたことには、触れなかった。

彼は、広島が選ばれたのは、その軍事的 중요さのためでなく、米空軍がまだ爆弾を落として壊滅させていない、日本のわずかの都市の一つだからだと知っていた。アメリカの高官たちは、実は、最初の原爆を、最大限の恐怖と破壊を作り出す実験として使おうとしていた。彼らは、この新しい兵器の力がどれくらいのものか試すために、広島と長崎という“処女標的”を選んだのだった。1945年7月、戦争担当相のヘンリー・スティムソンは、もし日本の都市がすべて爆撃されたら、原子爆弾が完全に“その威力を示す”ことのできる標的がなくなってしまうと、トルーマンに知らせた。スティムソンの日記によれば、トルーマンは「笑いながら、分かったと言った」。

大統領はすぐに、“軍事基地”という正当化の爆弾を落とした。しかし結局、ワシントンは、広島原爆による壊滅の写真の大部分を、検閲しようとしたのだが、世界は直ちに、アメリカがたった一つの爆発で一つの都市を破壊し、膨大な死者をつくり出したという事実を把握した。そこで大統領は、少なくとも次の70年は効力をもつだろうと思った、アポロギア（弁明）に焦点を置いた。その議論の核心は、同じ8月9日のスピーチに現れた——「我々は、真珠湾で、警告なしに我々を攻撃した者たちに対して（この原爆を）使ったのだ」と彼は言った。「アメリカ兵捕虜を飢えさせ、殴り、処刑した者ども、戦争の国際法に従うふりさえしなかった者どもに対してだ。我々は、戦争の苦しみを長引かせないように、また何千、

何万というアメリカの若者たちの命を救うために、これを用いたのだ。」

1945年までに、ほとんどのアメリカ人は、広島や長崎の市民が日本の戦争犯罪を犯したわけでないことを、気にしなくなった。アメリカの戦時文化は、数年間、日本人を非人間的とするだけでなく、人間以下として描く“黄禍”(yellow peril) 人種差別の、長い歴史に依存していた。トルーマンがその日記で言っているように、それは“野蛮人”だらけの、“後悔を知らない、無慈悲な、狂信的な”人間どもであって、天皇に忠誠を尽くすあまりに、すべての男、女、子供が、最後の最後まで戦おうとするのだ。その当時の雑誌は、決まって日本人を、サル、類人猿、昆虫、害虫として描いていた。このような敵に対しては、本当の意味での“市民”などというものはない、というのが一般的な考えだった。だから、絶滅に近い目に遭わせるか、少なくとも、その道を突き進むアメリカの意欲を見せてやる以外に、この者たちを降伏させる方法はない。ウィリアム・“ブル”・ハルゼー提督が1944の記者会見で言ったように、「唯一のよいジャップは、6カ月前に死んだジャップだ」。

<http://www.amazon.com/dp/0394751728/ref=nosim/?tag=tomdispatch-20>

第2次大戦後、数年たって、人種憎悪の最も激しい言い方は減った。しかし、原爆は戦争を終わらせ、日本本土を侵略する必要をなくし、歯と爪の戦いが両側に膨大な損失を強いるのを防ぐために、必要だったという幅広い見方は、確信と共に堅持された。歴史上、最も恐ろしい兵器、将来のハルマゲドンに道を開く兵器が、したがって命を救ったのだった。これは本音の見えるきまり文句だったが、核兵器を導入する口実として、最も幅広く、最も永続的に支持された。トルーマンが引退して、1955年に回顧録が出版されたころには、彼は、もし日本を侵略していれば、50万のアメリカ人と、少なくとも同数の日本人が死んだであろうと、特別の思いで主張するようになっていた。

<http://www.amazon.com/dp/156852062X/ref=nosim/?tag=tomdispatch-20>

年月がたつにつれ、これら2発の原爆が“救った”人々の、だんだん大きくなっていく数量が、ある種の神聖な数魔術になっていった。1991年には、例えばジョージ・H・W・ブッシュ大統領は、トルーマンの“勇気と先見の明ある決断”を褒めたたえて、この2発の爆弾が“何百万のアメリカ人の命を救った”と主張した。その頃には、原爆による大量虐殺は、遥かにより大きい苦しみと殺戮を防いだ、慈悲による殺し(mercy killing)に変わっていた。<http://japanfocus.org/site/view/2479>

トルーマンは、自分の決定について、ひとかけらの後悔も、一瞬の疑いも持たないと主張しながら死んでいった。たしかに、1945年8月6日に至る肝心の数週間に、彼が別の選択肢を真剣に考慮したような証拠は、記録に残っていない。

## “修正主義者”は事前に存在した

20年ほど前、スミソニアン国立航空宇宙博物館が、第二次大戦終結の50周年を記念して、ある大胆な展示物を計画した。その中心に、ある異常な構築物——広島に原爆を落とすのに使われたB-29超空要塞“エノーラ・ゲイ”の機体——を置こうというものだった。しかし館長や歴史コンサルタントたちは、米軍の科学技術の勝利記念物を増やすのでなく、別のものを考えた。彼らは代替案として、この爆弾の発達経緯、その使用をめぐる論争、それがもたらした長期の結果といった、思考を喚起するような展示をしようとした。それは戦争を終わらせ、“命を救う”ために落とされたという、大統領の執拗な主張を疑問とする、いくつかの証拠を博物館はそこに加えようとした。

まず初めに、訪問者には、アメリカの最も有名な、第二次大戦の軍事司令官の中には、原子兵器の使用に反対した人々がいたことを、知ってもらうことにする。実際、その当時の5つ星将軍や提督の7名のうち6名が、そんなものを使う理由はなく、日本はすでに敗北していて、それを知っており、アメリカが侵攻するまでもなく、降伏するだろうと言っていた。ウィリアム・リーハイ提督や、アイゼンハワー将軍のような人たちは、日本への原爆攻撃は“野蛮”であり、“私がこれまでに聞いたあらゆるキリスト教倫理と、知られている戦争法規”を破るものだという見解だった。

[http://www.amazon.com/Untold-History-United-States/dp/1451613520/ref=sr\\_1\\_1?s=books&ie=UTF8&qid=1438283221&sr=1-1&keywords=untold+history+of+the+united+states+oliver+stone](http://www.amazon.com/Untold-History-United-States/dp/1451613520/ref=sr_1_1?s=books&ie=UTF8&qid=1438283221&sr=1-1&keywords=untold+history+of+the+united+states+oliver+stone)

トルーマンは、この爆弾の使用に反対する軍司令官たちに、真剣に相談しなかった。しかし彼は、軍事専門家たちに、1945年9月1日と、1946年3月1日に予定されている、日本本土の2つの島への侵攻を始めたなら、どれくらいの米側の死者が出るかを訊ねた。彼らのあげた数字は4万であり、彼が戦後によくあげた50万を、遥かに下回るものだった。この概数でさえ、日本が、完全にアメリカに制海空権を奪われても、自軍に食糧、燃料、兵器を供給できる疑わしい推定に、基づいたものだった。

スミソニアン博物館が更に、訪問者に知らせようと計画したことは、何人かの重要な大統領アドバイザーが、“無条件降伏”と、天皇の在位を日本国に許すという条件と引き換えに、彼の命令の撤回を強く求めたことである。これは、ほとんど直ちに降伏へ繋がったと思われる平和的な代替案であった。トルーマンはこの忠告を拒否した。そしてこの同じ譲歩を認めたのは、核攻撃の後だった。

<http://www.amazon.com/dp/0316831247/ref=nosim/?tag=tomdispatch-20>

しかし忘れてならないのは、こうした爆弾を落としたトルーマンの動機に関わっていたのは、敗北した日本でなく、躍進するソ連邦であったことである。ソ連が 1945 年 8 月 8 日に、対日本戦争に入ることを通告してきたとき、トルーマンが心配したのは、たとえ短い時間でも敵対関係を引き延ばせば、ソ連が東アジアに、より大きな分け前を要求してくるかもしれないことだった。彼と、国務長官ジェームズ・バーンズは、新しい爆弾（まだアメリカだけが持っていた）の威力を目に見える形で証明してやれば、あの共産主義権力は、ヨーロッパで、より扱いやすくなるかもしれないと考えた。

<http://www.amazon.com/dp/067976285X/ref=nosim/?tag=tomdispatch-20>

エノーラ・ゲイのようなアメリカの工作物を見せるだけでなく、スミソニアン博物館の館長たちは、広島核による破壊の、心を引き裂くような、いくつかの展示物を見せようと思った——女子生徒の焼けた弁当箱、爆発の瞬間に凍結された時計の文字盤、溶けてくっついたロザリオ、それに、死んだ者と死につつまある者の写真。こうした展示物が、あの飛行機の巨大な機体の脇に置かれているのを、この大爆発の犠牲者に対するいくばくかの同情なしに、見ることはできなかったであろう。

こうしたことは起こらなかった。この展示は、嵐のような抗議の後で、取り消しになった。米空軍協会が、メディアの最初のスクリプトのコピーをリークしたとき、批判者たちは、スミソニアンが“政治的に正しい”“反米的な”歴史“修正”を行ったとして弾劾した。こうした展示物は、アメリカの退役軍人への侮辱であり、根本的に非愛国的なものだ、と彼らは言った。この告発をリードしたのは保守派だったが、上院は満場一致で、スミソニアン博物館が“修正主義的で犯罪的”だとする決議案を通過させた。これには、公式アポロギアのきちんとした復唱文句がついていた——「エノーラ・ゲイの役割は、…第二次大戦を慈悲深い終結へと導く上において重要だった。それはアメリカ人と日本人の生命を救うことになった。」 <http://www.gpo.gov/fdsys/pkg/CREC-1994-09-19/html/CREC-1994-09-19-pt1-PgS48.htm>

**慈悲深い？** ちょっとこれを考えてほしい：——広島と長崎で殺された市民の数だけでも、太平洋戦争の全期間中に戦死したアメリカ兵士の数の、倍以上だった。

最後には、スミソニアンは、エノーラ・ゲイ自体のほかは、ほとんど何も展示しなかった。それは、“**善なる戦争**”におけるアメリカの勝利の、輝ける遺物である。

——前半ここまで